

いっぺいといっぱく Vol.55



市長は長久手をどんなまちにしたいか、そのために何に取り組もうとしているのか。その想いを市長の語り口でお伝えします。みなさんと語り合うように、一緒に未来の長久手のことを考えてみましょう。また、市HP【によぜがもん】もぜひご覧ください。[市HPのトップページから「によぜがもん」をクリック。]



さみしい…

昭和41年の春、我が家は、初めて耕運機を買いました。それ以前、田植えはすべて人力で作業するしかなく、他人の力も借りないと、生活ができない時代でした。ご近所との付き合いを大切に、ご近所に頭を下げて、互いに助け合いながら生活をしていました。

耕運機という動力を手に入れたことで、他人の力を借りなくても生活ができるようになりました。効率的で便利な生活と引き換えに、近所の人に頼んで一緒に作業をする機会は減っていきました。この50年間、日本中が豊かさや便利さを求めて、大人達は忙しくなりました。

私事で恐縮ですが、今年に入り、母が亡くなりました。103歳でした。亡くなる前の10年間ほどは、ショートステイやデイサービスを利用していましたが、それ以前は、日中、家に一人でした。日中以外は、家族と一緒に過ごし、朝晩には「行ってくるね」「ただいま」と声を掛けていました。母が亡くなってから、その当時の日記を読んでもと、「誰もいない。今日も家の中は静かだ。さみしい」「知り合いが亡くなった。さみしい」「世の中、近所が変わってしまった。さみしい」と毎日のように「さみしい」「さみしい」と書かれていました。

その頃、私は介護施設で働いていました。介護職員に対して、「ここに居る人は、全員さみしい思いをしている。家族は、なかなか会いに来てくれない。職員は忙しくして、話しかけづらい。だから職員から声を掛けてほしい。相手の目を見て話をしてほしい」といつも話していました。それなのに、自分の母の、日中のさみしさをどうしてあげることができなかったのを、日記で初めて知りました。ショックでした。

施設に入居している人だけでなく、家族と住んでいても、高齢者のみなさんは、さみしい思いをされています。高齢者だけでなく、核家族で子育てをしている方も同じかもしれません。家族だけで、さみしさを紛らわせてあげることが難しいのであれば、家族以外の方が、声を掛けたり、誘ってみたり、少しずつでもいいので、できることはないでしょうか。「小学生から『こんにちは』と言われて、うれしかった」という高齢女性の声も聞いたことがあります。たったそれだけのことで、さみしい思いを軽くすることができるのです。



ご近所で「いつもと違う」と気づいたときはお電話ください

長久手市地域見守り安心ほっとライン

0561-63-5556

24時間  
365日受付



表紙の写真もう一枚

「ひな祭り」のひな人形と、一足早く「端午の節句」のかぶとを作りました。子ども達は、細かい作業にひと苦労しながらも、保護者のみなさんに手伝ってもらいつつ、1時間30分ほどで完成。楽しみながら、日本の伝統文化に触れていました。

